

心に残るエピソード

石黒節子

踊ることが好きだった私は、当時、東京教育大学の体育学部に舞踊研究の拠点があることを知り、受験した。そこでは比較的自由にやらせてもらったと思う。

私の両親の教育方針は「女は早く結婚し、家庭を持つことが第一」というものであった。幸い、立山登山中、好きな人と出会い、専攻科を修了してすぐ結婚した。30歳の時、松本先生からお茶の水女子大学に舞踊中心の学科設立の為のメンバーへの誘いがあった。既に子供2人を育てていた私は周囲の協力を得て、挑戦することにした。「いつ辞めても旦那さんがいるから生活できる人」という先行きの見えない人事であった。

お茶の水女子大学は、学問を重視する大学であり、実技を有する領域は評価される上で苦労があった。何故ならば、実践を可能するには理論の3倍の時間を要すると言われる。言葉で言ってしまうは一瞬で済むことを、身体を通して表現するには数倍の時間を必要とされる。これは、諸芸術や勿論スポーツ各種も同様である。従って、これらの分野では芸術大学、体育大学と言う名のもとに実技を重視して評価されるところが多い。運動感覚や視、聴、嗅、味、触覚などの言語以外の感覚を総動員して一つのことを成し遂げる分野だからである。「舞踊学」はこれら困難の上に打ち建てなければならない。

松本先生が表現体育に始まり、舞踊教育学という柱を実技を大切に、日本初の学科を打ち建てた功績は大きい。着任後、早速、学科成立のための業績調査、修士課程、博士課程成立のための審査は続いた。大学全体の制度改革の中で、音楽と共に芸術表現行動学科という名称になった。

研究室の窓から飛び降りる？

記憶に残る先生の厳しさと言えば、就任早々



全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）
「熱帯」入賞の時

「学校体育」という雑誌に「ダンスの授業において、創作のみでは無く、リズムカルな部分の指導が必要だ」と投稿したのを見て、「創作」に価値を置いている方針の自分（松本）に反対するなら出ていけと叱られたことである。そのすさまじさに、7階の研究室の窓から飛び降りようかと思ったくらいである。現在、リズムと言う分野が指導要領の内容に取り入れられているが、現状では効果的に役目を果たしているのか疑問である。制度を変えるときは綿密な調査と研究が必要である。なぜなら「既成ダンス」から「創作ダンス」に移行した時の戸倉先生との闘いをよく耳にしたからである。先生は、アメリカのマargaret・ドゥブラー先生を訪ね学び、奈良の付属小学校で実践を重ねることを通して改めた。勿論敗戦という価値観の変換もあったであろう。「舞踊は律動的な動きという以上にきびしく定義できない」と述べたクルト・ザックスの動きの律動的な形式、空間の造形的な感覚、目にうつり、そして想像される世界の明確な再現という「心的経験を表現するために自らの肉体で創造する」という観点からすると、体育指導においてヒップホップに傾いている現状をみると、何か違和感を感じるのは私だけであろうか。

全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）の立ち上げ

「舞踊は、心身を投じて行なう表現の世界」であり、教育現場にあるクラブ活動においては個の独自を發揮しつつ、個を超えて新しく他と共に創造的芸術経験を味わう良い機会提供する場を与える」という考えにもとに、1988年に全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）は立ち上げられた。その準備のため先生は神戸市、NHK、ミズノスポーツなどの交渉に携わった。連日遅くまで代々木のオリンピックセンターに通い、準備を進めていた。私はそのサポート委員として第1回から第6回のInternational College Dance Festival, 1993まで関わった。この国際関係のイベントには色々困難があった。おかげで、以降、自身の海外公演を実施するうえでの貴重な体験となった。

厳しさと、周囲を取り込む実行力は他に見られない。側にいた人々はいつの間にか取り残されないように必死に走らざるを得なかったが、そこから多くを学んだのも確かであり、今では心から感謝している。